

## 道徳性の科学的理解

——人類をつなぐ道徳への手がかりを求めて——

松浦勝次郎

### 目次

- 一、はじめに
- 二、道徳の科学的研究
- 三、科学的理解
- 四、知識と道徳
- 五、錯覚
- 六、シュレーディングラーの「わが世界観」より
- 七、科学的理解と実践
- 八、むすび

### 一、はじめに

人類のつながりは、生活する人々の自覚と想像を超えて、さまざまな面から広がり、ますます急速に深まりつつある。その事実が、現在、人類文化の大きな流れを根底で動かしている。つながりが強まると同時に、民族や地域による考え方や生き方の相違も次々にいろいろな形で表面化してきて、そのことが、人間生活に多大な影響を与え、大小のさまざまな問題を生み出している。

多様なつながりの中に、相互扶助的な秩序が要請され、それを築くための共通の標準が強く求められている。今求められているのは、一つの考え方に基づいて他を変えて全体を統一するための標準ではない。これまでに築

かれ蓄積されてきた多様な価値のそれぞれを尊重し、それぞれが活かされる道を開くような基準である。それはまず、多様な文化の中で生活している人々によって、共通に理解され共通に受け入れられるものでなければならぬ。人類が共通の基盤に目を開き、人間自身がそれぞれに変わることが求められる。現にその変化が進みつつある。

人類文化全体の大きな流れとして、異なる文化の間の関係が、対立・抗争から共存・相互扶助の方向へと大きく変わろうとしている。

現代は、科学の時代であると言える。科学の進歩とそれに伴う技術の発達によって、人類社会は大きく変化し、すべての人間があらゆる面でその影響を強く受けている。考え方は多様で互いに異なっているけれども、世界中の人々が、同様の科学知識を学び同様の科学技術を利用して生きていることから、現代の人類は科学知識と科学技術によってつながっているように見える。人類社会そのものが、知識と技術によって支えられ動かされているものと、一般に考えられている。しかし、人間社会の在り方を少しでも深く考えてみると、知識・技術はあくまでも表面に現われる手段であって、より深い人間の心の働きが社会を根本で動かし支えている。

科学の進歩は、人類に物質的な豊かさや多大な便益をもたらしたが、その一方で多くの地球的・人類的な問題をも生み出した。それは人類の精神にも深い影響を与えている。現代社会は科学思想と技術によって進歩・発展してきたが、その限界が広く認識されるようになり、現在では、科学技術の進歩は将来への希望を生み出すよりは、むしろ不安の種となりつつある。科学への信頼と評価が、今大きく変わりつつある。

しかしそれでも、科学的な方法は、世界中の多くの人々に、共通に、事実についての確実な理解と納得を与え、現在においても、最も有効であり弊害が少ない方法であるという事実は重要である。おそらくは未だ、

科学的な方法だけが、民族や宗教を超えて世界に広く通用する唯一の方法である。

モラロジーの基礎には、人間のあらゆる営みの根本は道徳であるという視点がある。人間が生み出すあらゆるものの基盤には、人間の道徳性があり、人間が実行する道徳的な行為が、人間社会を根本で支えているということである。知識・技術も人間の精神が生み出したもので、その成立の根本はやはり道徳性によって支えられている。社会は人間の道徳性の発達と共に進歩してきた。対立・抗争から共存・相互扶助への道が開かれるためには、人類の道徳性が向上し、人間自身が新しい人間に変わることが根本である。

そのために、まずその道徳性そのものをどのように理解するかが、道徳の重要性を認識する上でも、それを実践する上でも、その基礎として重要である。

科学的な方法には限界があり、科学は万能ではない。これまでの「科学的」な知識だけで、道徳の問題を完全に理解し説明することはできない。しかしそれでも、現在では、人間の道徳性や人間社会の道徳律そのものを、科学的な知識と方法に基づいて理解し説明することは、人類をつなぐ道徳への手がかりとして有効であり重要である。それが、人類に共通の基盤を築き、相互扶助的な秩序への道を開く上での、一つの重要なことと見られるかもしれない。

現代人の内面では、科学的知識と結びついた、道徳性についての理解が、道徳実践の基礎として重要な働きをしている。

以上のような観点を基礎として、本稿では「科学的理解」を中心に道徳性理解の内容とその働きについて考察する。廣池千九郎の「理解」だけでなく、「科学的理解」の重要な一例として、特にエルヴィン・シュレーディンガーの「理解」をとりあげて考察した。

## 二、道徳の科学的研究

モラロジー研究の目的は、「因襲的道徳及び最高道徳の原理・実質及び内容を比較研究し、且つ併せてその実行の効果を科学的に研究せんとする」(『道徳科学の論文』①五頁)とされていて、『道徳科学の論文』では、人間が実行する道徳の実質とその実行の効果についての科学的研究がその中心課題となっている。その根本にかかわる事項の一つとして、道徳の問題を科学的な方法によって研究することが可能かどうかという問題がある。その問題に対しては、未だ誰によっても、誰もが納得するような解答は示されていない。しかし、モラロジー研究の基盤には、道徳の問題を、それは通常よりは広い意味においては「科学的方法」で扱うことが可能であるという前提がある。

『論文』では、科学的研究の対象としては、実行の効果の研究が強調されている。もう一方の道徳の実質の研究については、それを科学的に扱うとは、人間の道徳性や人間社会の道徳律を「科学的」な事実に基づいて「科学的」な方法によって証明あるいは説明することとなる。そのような意味での道徳の実質の研究についても、『論文』には、多くの事実や先人の研究の結果が示されていて、多様な研究の成果が記述されている。しかし、それらは、そのままの形で、現代人が理解している通常の意味での「科学的」研究の結果としては、受け入れられにくい要素も多く含んでいる。

廣池千九郎以前の、道徳の科学的研究については、『論文』に、コント、ピアスンその他数名の学者の研究が紹介されているが、「道徳科学というふうなもので名の高いものは見当たらず」(『論文』①七頁)とあり、やはりそのような研究の試みは多くはなされていない。それらの学者の試みにもかかわらず、それまでに十分な成果が収められなかった理由として、個人の行為に関する問題が極めて複雑であること、その研究を可能にする諸科学が不完全であったことなどがあげられている。その後、自然科学の進歩と科学思想の普及に伴って、むしろ、道徳と科学の分離はますます進み、道徳の問題が「科学的」な方法で、特にそれを学術的な研究の対象として取り扱われることはますます少なくなった。

しかし、実生活の中で科学的知識を利用する際には、知識と道徳を分離することはできないから、個々人の内面では、それらの整合ということがつねに問題になる。現代人には、科学的知識と道徳の問題は全く別のもので完全に分けることができる、さらには分けることがよい、というよく行き渡った強い固定観念があるから、知識と道徳の整合あるいは統合という切実な問題意識が深く潜在化している。特に道徳の問題から分離された領域の研究を専門とする科学者に、道徳の問題を科学的知識から十分には説明できないが、科学的知識に結び付けて(こじつけて)理解しようとする、潜在化した強い傾向がある。

実生活の中では、道徳実践の基礎として、学術的な研究の対象とされるような問題よりも、潜在化した内面での道徳性の理解が、より重要な働きをしている。ここでは、厳密な証明や説明によるものだけでなく、より曖昧で潜在的ではあるが、個々人を内面で納得させている観念も含めた、道徳性の「科学的理解」の内容と働きについて考えてみたい。

## 三、科学的理解

『論文』には、「科学 (science) の真の意味は、その研究法がいかなる原理もしくはいかなる方法によるも、それは問題ではないのであります。しこうしてその研究の結果が、人間社会の事実と吻合して、その研究せる学問

上の原理によりて社会に立てば、何事にも成功して、安心、平和及び幸福が実現せらるるので、はじめてそのいわゆる学問上の原理が正しいのであるのです。その場合に、その学問上の原理に対して、これを科学的研究の結果と称し得るのであります。」(『論文』①序文二二五、二二六頁)とあり、その方法に特別の限定を加えず、「科学」という語に「事実」に適合する知識の総体」というほどの広い意味が与えられている。特に、モラロジー研究の成果の実質である最高道徳については、その最も重要な根拠は、諸聖人の実行と教訓であり、また「究極のところはその道徳実行の基礎を神の信仰に置く」(『論文』①序文九一頁)とあり、最高道徳の実質の理解は、通常の意味での「科学的理解」を超えたものである。

現代人が理解している通常の意味でも、「科学」は、「事実」に基づく人間の知識の総体を意味している。しかし、ここでの「事実」とは「科学的事実」であり、それは「科学的方法」によって得られた事実である。その「科学的方法」ということに、普通は特別の意味が与えられ多くの制限が加えられている。それには、誰にも受け入れられるような厳密な定義を与えることは困難であり、したがって「科学的方法」の標準は、人によりさまざまで一定しない。しかし、多くの特別の限定が加えられたものであるという点では共通しており、またその限定の基本となる事項は大体共通している。

現代に生きる我々は、科学、殊に自然科学の成果から直接に大きな影響を受けているが、それだけでなく、「科学的」という観念からも強い影響を受けている。それが最も信頼できるものであるという通念が、漠然とではあるが強く働いていて、それが我々の判断の基礎を支えている。それと同時に、それによって縛られているとも言える。一般に、「科学的」ということには、実証的、合理的、体系的、明確、精確などの観念が結び付いているが、その実質的な内容は人により異なる。共通する点は、それは普通は漠然としたものではあるが、特に自然科学

学における「科学的方法」の強い影響を受けていて、主体と客体の区別が明確であり、特に、確かな信頼できる対象は物質であり、またそれを認識し理解する人間の意識の働きとして理性にのみ強い信頼を置くという点である。通常「科学的理解」と呼ばれるものの背景には、そのようなものがある。

通常の意味での「科学的方法」と廣池千九郎のそれとの間には、基盤となる「事実」を認識する方法において相違がある。しかし、学問の対象となるのは、共有することができる事実の「かたち」だけであるから、有用であると思う事柄を「事実」として示す基本的な方法として、多くの観察や実験を重ね、それらと併せて先人の経験と研究の結果をその裏付けとして示すということでは、両者は共通している。

特に、両者とも、それが事実であるかどうかの最後の判断は、まったく相手に任せるということが重要である。通常の「科学」では、その結論が相手にどのように理解されどのように利用されるかは、科学自体の問題としては問われず、その対象の外に置かれる。それに対して、モラロジーでは、判断は相手に任せるが、その結論が、相手の心に伝わり、相手がそれを自分から実行し実現して、実際に相手によい結果が得られることを、モラロジー自体の問題として最も重視している。

#### 四、知識と道徳

最高道徳では、知識と道徳が一体であることが重視されるが、通常は、教育の場で知育と徳育が分類されるように、知識と道徳は区別される。特に「科学的」な知識は、まったく道徳から切り離されたものであると考えられるのが普通である。

道徳の問題を「科学的」な事実として理解しようとする態度の基盤には、知識が道徳に先行するという前提が

ある。そこには、科学的知識は理性の判断によるものであるから信頼できるが、それに較べて道徳的判断は感情や主観的意志を含むものであるから、不確実で信頼を置けないという観念が働いている。

モラロジーの基盤には、人間実生活の根本は道徳であるという視点がある。したがって、道徳と知識を分類すれば、道徳が知識に先行するという考え方が基本となっている。たとえば、『論文』には、「最高道徳実行の基礎的原理」の中の「絶対服従の精神及び行動」の説明の中に、「すべて上に立つものが下のものに対してある事柄の可否を諮詢しましたならば、下のものはこれに対して忌憚なく、しかしながら、慎重に自己の意見を吐露し、たとい、上の人の意見と異なってもそれは知識の問題ですから、差し支えはないのであります。しかるに上のものの命令は具体的でこれに従うと従わぬとは道徳上の問題になりますから、下のものはこれに服従するを要するのです。ただその服従の動機が普通道徳では利己心の上から円満を期して服従するを、最高道徳では報恩もしくは救済の精神から服従するのであるのです。」(『論文』⑦二二五、二二六頁)とあり、実践上の視点から、道徳が知識に先行するということについての具体的な説明がなされている。

また、J・A・ラワリーズは、「科学(この言葉が現代一般に用いられている制限された意味において)は一定の道徳的態度がゆき渡り、尊重されているところで初めて追求できるものであることに注目すべきです。従って、見方によれば、道徳は科学に先行します。なぜなら科学は、研究者がまず道徳と深く関わることなしには存在し得ないからです。」(『科学・道徳・モラロジー』一四頁、モラロジー研究所、一九七六年)と述べて、人間の道徳性が科学成立の前提条件であることを示すいくつかの例をあげている。

人間の精神の働きとしては、知識の習得や利用の前に動機・目的がある。知識を何のためにどのように習得して利用するかは判断は道徳性に属するから、実践の上では、事実として、道徳は知識に先行していると言える。

しかし、実際の意識の働きの中では、知識と道徳はそれほど明確に区別されるものでなく、どちらが先行するかについても、それほど明確な序列があるわけではない。実際の意識の働きとしては、知識だけが独立に働くということも、道徳性だけが独立して働くということもない。

知識と道徳の働きについて、通常の理解の背後には、それらの分析的な理解の過程で生み出された錯覚がある。概念としては区分できて、実際の働きの中では、一方だけではまったく意味をなさず、一体となった働きとして把握されなければ実相の理解に近付けない場合が多い。知識と道徳の働きも、そのようなつながりを持った概念の組の重要な例である。

しかし、一般に実際には知識と道徳は区別して理解されている。したがって、現実の問題としては、基本的な観念としてどちらが先行すると考えるかが、その個人の精神的態度や、したがって実際の行動にも大きな違いを生む。

## 五、錯覚

錯覚とは、客観的事実を違えて知覚することである。大半の人によって錯覚され易い事実があり、そのような場合は事実と一致していても、気付かれずに見過ごされることが多い。基本的なところに錯覚があるときは、特にそれに気付くことが困難となり、事実にとじつけるために、糊塗的な論理が積み重ねられることになる。意図的に錯覚が利用される場合もある。

錯覚されやすい事柄の例を多数考えることができるが、実際にはすべての分析的な理解には、多かれ少なかれ錯覚が伴う。事柄の内容を明確に把握するために、そこに含まれる概念の境界を明確にしようとすると、そのこ

とによって、境界が明確にされた一面だけが強く知覚され、その他の面が隠れて見えにくくなる。したがって、分析的な知識の習得には必ず新しい錯覚が伴う。

錯覚は、事実の一部だけを知覚して、他の一半を見失うことによって起る。ものごとの一半が隠されている場合もあるが、錯覚の最も大きな原因は、多くの場合、知覚する側の偏見である。人間の精神の働きには、錯覚を造り出すプロセスと取り除くプロセスとがある。聖人や賢者の、人類に及ぼす最も重要な影響は、偏見を取り除いてものごとの本質にかかわる見失われた面を人類の心に覚醒することであると云える。それによって、人間が生きることに新しい意味と価値が与えられる。

最高道徳では、知徳一体が重視されるが、近代合理主義の立場では、観念として、人間の知識と道徳性の重なり合う部分をまったく認めず、両者を明確に分離する。そこには、事実としての知識と道徳の働きについて、その基本となる認識に錯覚があるのではないか。一方が意識されるときには、他方が潜在化して見えにくくなる。

#### 六、シュレーディンガーの『わが世界観』より

科学的知識と道徳性の理解を統合する試みの注目すべき一例として、本稿では特に、二十世紀の代表的な理論物理学者、エルヴィン・シュレーディンガーの『わが世界観』に記述されている内容をとりあげて考察する。シュレーディンガーは、現代物理学への直接の偉大な貢献だけでなく、科学全般の基本的な枠組みおよび全体の具体的な研究の方向にも大きな影響を与えた。また、最近の科学思想の基本にかかわる新しい動きにも、あらためて強い影響を与えている。

#### (一) エルヴィン・シュレーディンガー

エルヴィン・シュレーディンガー (Erwin Schrödinger, 1887-1961) は、オーストリアの物理学者で、波動力学の創始者である。量子力学建設の功績によりノーベル物理学賞を受けた。その研究は、物理学の基礎理論から宇宙論までの広い範囲に及び、哲学的な問題にも取り組んだ。また、『生命とは何か』で知られる生命論は、分子生物学の展開の間接的なきっかけとなり、その後の生命にかかわる研究の方向に大きな影響を与えた。

物理学者として極めて合理的な精神を持ったが、一方優れた感性を備えていて、近代合理主義を批判する人でもあった。

#### 〈略年譜〉

一八八七 オーストリアのウィーンで生まれる。(シュレーディンガー家は、十代以上も家系をたどることのできるオーストリアの名門の家柄であった。アルドルフは実業家であったが、学術を愛し学者や芸術家の友が多かった。エルヴィンは父親の強い影響を受けた。母エミリーの出たパウアー家もイギリスで代々続いた名門の家柄であった。エルヴィンは、名門の家の一人息子として大切に育てられた。)

一九〇六(一九才) ウィーン大学に入学。(この年、ウィーン大学の教授であったボルツマン死去(自殺)。エルヴィンは、ボルツマンの後任となったハーゼンエールに傾倒して物理学を学んだ。)

#### 〈注〉

『自伝』の中で、シュレーディンガー自身が、「私はフリッ

ツ・ハーゼンエールから「じかに」最も強い精神的な影

響を受けた——ただし長年一緒に暮らし、興味深い話の数々をいつも私にしてくれた父ルドルフは別にし

て。」と述べている。

- 一九一〇（二三歳） ウィーン大学卒業。フランツ・エクスマーの助手として大学に残り研究を続ける。
- 一九一四（二七歳） 第一次世界対戦勃発。砲兵士官として軍務に服す。
- 一九二〇（三三歳） アンネマリーと結婚。イエーナ大学に助手として赴任。
- 一九二一（三四歳） シュトゥットガルト大学、プレスラウ大学を経て、チューリヒ大学教授に就任。
- 一九二六（三九歳） 「固有値問題としての量子化」など六編の論文を発表して、波動力学の理論体系を建設。
- 一九二七（四〇歳） マックス・プランクの後任教授として、ドイツのベルリン大学へ移る。
- 一九三三（四六歳） 量子力学建設の功績（「原子論の新しい有効な形式の発見」）により、ディラックと共にノーベル物理学賞を受賞。ナチスの勃興に伴い、イギリスのオックスフォード大学へ移る。
- 一九三六（四九歳） グラーツ大学の招聘に応じて、オーストリアへ移る。
- 一九三九（五二歳） アイルランドのダブリン高級研究所に迎えられる。（それから十七年間を、静かなダブリンで過ごし、その間、時空構造や生命に関する研究などにも専念した。）
- 一九五六（六九歳） ウィーン大学の教授に就任し、祖国へ帰る。（数年ウィーン大学の教授を勤めたあと、晩年はチロル地方の山村アルプバッハに住み、思索と執筆の日々を過ごした。）
- 一九六一（七三歳） 死去

(二) 「わが世界観」より（『シュレーディンガーわが世界観【自伝】」、共立出版、一九八七年）  
シュレーディンガーの著書である『わが世界観』(Meine Weltansicht) は、単行本として一九六一年に出版され、その英訳本が一九六四年に出版されて、多くの人々に読まれ影響を与えた。「わが世界観」は、「道を求めて」と「現実とは何か」の二編のエッセーからなっている。「道を求めて」が書かれたのは一九二五年（三八才のとき、波動力学にかかわる諸論文発表の前年）のことであり、それから三十五年のちの一九六〇年（七二才のとき、翌年の一月に生涯を閉じた）に「現実とは何か」が書かれた。

その内容のうち、特に本稿の主題にかかわる事項を以下に取りあげる。

### 《道を求めて》より》

#### ① 形而上学一般について

「カントがそうしたように、すべての思弁的形而上学を消し去ってしまったのは、比較的たやすいことである。それに向けて息をほんの少し吹きかけるだけで、思弁的形而上学などは吹き飛んでしまう。（中略）しかしながらそれは、人間の経験的な知識の内容から形而上学を真に消し去ったということを意味しているのではない。実のところ、もしわれわれがすべての形而上学を除去してしまうならば、どんな専門科学の、きわめて限られた領域の分野についてさえも、なんらかの明瞭な説明をするのはますます困難に、というよりおそらく不可能になるであろう。」（四九頁）

「この片寄った、いわゆる「技術の発展という名の」「象皮病」のために、西洋の知性、あるいはなんにせよ

このように呼ばれるものを目ざす、文化や認識という別の方向への発展が無視され、実にかつてなかったほどに弱められてしまった。(中略)

自然科学は幾世紀の間、教会によってきわめて卑劣なやりかたで従属させられてきたが、ついに自らの頭をもたげ、その神聖な権利と神々しい使命とを自覚し、この昔からの抑圧者に対して激しい憎悪に満ちた打撃を加えた。しかし教会は(十分なものとは言えず、しかもその職務に怠慢ではあったが)われわれの最も神聖な先祖以来の遺産を守るように命ぜられた唯一の委託管理人であった。しかもこのことに自然科学は注意を払わなかったのである。」(五三頁)

シュレーディングーは、物理学の目的を、マッハやキルヒホッフが考えたような実利的で簡便な手段の追求とは考えず、形而上学の必要性を主張する立場に立っている。しかし現実から離れた独断的で思弁的な形而上学は、カントによって批判されたように、否定されるべきだという立場をとる。シュレーディングーが重視する形而上学は、自然科学と矛盾するものではなく、むしろこれと相補的なもので、われわれの認識に不可欠なものと考えられる。

純粹認識の領域だけでなく、文化全体およびそれにかかわる倫理の問題に目を向けて、西洋の発展が、実利的な物理学や技術の方面だけに偏って進む結果となったことを問題にしている。それは必然的に、芸術や宗教の価値を二次的なものと見なすことに結びつき、利己主義の台頭につながる根深い問題だとしている。

自然科学は、キリスト教による自然認識の誤りをただし、知識を増大させ、近代になって急速に発展してきたが、しかしキリスト教が形而上学を育んだギリシャ文化という遺産を守ってきたのは事実であり、これを自然科

学が無視したのは誤りだったとシュレーディングーは考えている。人類が克服しようとしてきたエゴイズムが再び強まってきたのは、これに起因していると彼は指摘している。

## ② 哲学的驚嘆

「非哲学的姿勢と哲学的姿勢とは、次の事実によってきわめて明確に識別できる。(その中間の形態はほとんどないと言ってよい) すなわち前者は身近な事象を、あたかも自明であるかのごとく普通に受け入れ、本日ここで起きたことと昨日あそこで起きたことが異なっているというような、ただ特別の内容にだけ驚きを感じる。ところが逆に後者は、身近な事象を始めわれわれが会うすべての事象を一般的に特徴づける、あらゆる体験に共通した特性を見いだす——これを次のように言ってもよい。すなわち後者は、いかなる体験および認知一般も可能であるという事実を、驚異の契機として受けとめるのである、と。

この二番目のタイプの驚嘆——そして、それが現実に起こることは疑いもないのだが——こそが、真に驚嘆に値するものであると私は考える。」(六一、六二頁)

シュレーディングーは、ありふれていて常にあるもの驚きを感じて、事象全体の関連性を見いだす現象を、直接に経験し得るものを超えたものへ向かわせる根本的な要因として重視する。

## ③ ヴェーダントの世界

「哲学が現実にかかえている困難の原因は、観察し思考する個々人の、空間的かつ時間的な多数性にある。し



かし、かりにただ一つの意識のなかにすべての事象が生じるとすれば、ことは簡単になろう。」(七六頁)

「もっとも私は、われわれの知性にとって可能な、首尾一貫した思考による論理的手段をもとにしても、この困難が解決できるとは思わない。がしかし、その答えを以下のような言葉で簡単に表現することはできよう。すなわち、われわれが通常知覚する多数性は、たんなる仮象「みせかけ」にしかすぎず、決して現実のものではない、ということである。ヴェーガンタの哲学は、これを基本的な哲理とし、多くの比喩によってその哲理を明らかにするべく、真理の探求に努めてきた。なかで最も魅力的なものは、多面体クリスタルを用いた比喩である。このクリスタルは、現実には一つのを、無数の似姿にして映し出しはするが、これによって対象物が現実が増加するのではない。」(七六、七七頁)

「私の言わんとすることは、このような汎神論などではなく、通常の理性では信じがたいことかもしれないが、君——そして意識をもつ他のすべての存在——は、万有のなかの万有だということなのである。君が日々営んでいる君のその生命は、世界の現象のたんなる一部分ではなく、ある確かな意味あいをもって、現象全体をなすものだと言うこともできる。」(八一、八二頁)

「この永遠のいまという(人々が、自らの行いのなかでめつたに自覚することのない)真理の感得こそが、倫理的に価値のあるすべての行為を基礎づけるものである。」(八二、八三頁)

ヴェーガンタとは、古代インドのバラモン教の根本聖典ヴェーダの終わりの部分を意味し、それは「ヴェーダの極意、秘義」と考えられた。これはまたウパニシャッドとも呼ばれ「奥義書」と訳されている。このウパニシャッドの根本原理に基づいて、不二元論を説いた学派の哲学をヴェーガンタの哲学という。ブラフマン(梵)を宇宙の唯一絶対の究極的原因とし、アートマン(我)の存在原因とは終局的に一致するという梵我一如を根本原理として追究した。八世紀にシャンカラが大成し、十一世紀にラーマヌジャがさらに発展させた。シャンカラによると、この唯一の实在以外はすべて幻影(マーヤ)であるとされる。

シュレーディングーは、ショーペンハウエルを通して、ヴェーガンタの単一の教義を学び(『自伝』)、それから強い影響を受けた。それが、シュレーディングーの世界観の基盤となっており、彼も梵我一如を根本原理として考えている。

#### ④ 自然科学的考察への通俗的な手引き

「前章で論じた『ヴェーガンタ的な』世界像による一つの見解は、通俗性を帯びた不完全な陳述ではあるが、現代の自然科学的な考察からしても、これはきわめてなじみやすいものである。『この見解によれば、』親から子へと代々家系が続いてゆくという、この生殖行為は、「生命の途切れた」本質的な中断ではなく、肉体と精神を有する生命体が、一見したところ不連続なようにくびれて見える現象にはかならない。あるいはまた、深い眠りの前後で私の意識が同一であるのとまったく同じ意味あいにおいて、ある人の意識と、その先祖のうちの一人の意識と同一である、と主張することができる。」(八五頁)

「少なくとも多くの動物の本能のなかに、まさにそのような個を超えた記憶の痕跡を見いだすことができるほどに、このような認識に関係した領域は、かなりの範囲にまで拡大している。」(八五、八六頁)

「いかなる自我も単独ではありえない。つまり自我の背後には、肉体的事象および——全体のなかでは特殊な部類の——精神的事象の途方もない連鎖が広がっているのである。そして自我はこの連鎖に含まれ、そのなかで相互作用し、連鎖によって維持されているのである。」(九二頁)

「この思想によって個人の誕生を見るならば、私という人間は、誕生をもって初めて創造されたのではなくて、このときまさに深い眠りから目覚めたのだということになる。私の希望と努力あるいは恐怖と不安は、私より以前に生きた幾多の人々のものと同じであると考えられる、そして私は、幾世紀もまえに私が初めて抱いた願いが、幾千年を経たのちに成就されるにちがいないと信じていることができる。先祖からの継承なくしては、どんな思想も私のなかで芽生えることはない。」(九三頁)

シュレーディングーは、学生時代に、ゼーモンの著作を読んで彼のムネメ理論に共感した。

〈注〉

リヒャルト・ゼーモン(1889—1919)は、ドイツの動物学者。主著は『記憶』、『記憶の感覚』など。有機的記憶説

としてのムネメ論を唱え、一種の獲得形質として獲得反応の遺伝を説いた。ゼーモンによれば、すべての有機体

はムネメ(＝記憶)という機能をもつ。外界による刺激が有機体に及ぼす持続的影響が、ムネメとなる。ゼーモンの見解は、それが獲得形質の遺伝と異ならないと見られたことから、当時、一般の生物学者からは、ほとんど

相手にされなかった。シュレーディングーの他、たとえばバートランド・ラッセルは、ゼーモンの理論を詳しく研究し、ムネメ理論の意味づけを行なった。

シュレーディングーは、ゼーモンの理論と結び付けて、ヴェーゲンタの世界像の自然科学的な説明を試みている。有機体の個体を超えたつながりと意識の連続性の事実から、それが、自然科学的な考察からしても、極めてなじみ易いものであることを示している。

⑤ 意識化について

「われわれが意識的に——しかも幾分積極的に——関与している任意の現象が、もしまったく同じ仕方でも繰り返されるならば、この現象は次第に意識の領域から消えてゆくであろう、ということである。(中略)意識のなかに入り込んでくるものは、その現象過程全体ではなく、その変異あるいは異同のみである。」(一一一、一二二頁)

「脳のみならずからだ全体、つまり個体発生全体は、過去幾度となく生じてきた諸々の事象が徐々に埋め込まれ、記憶となったものの反復なのである。それゆえに、これまで神経系の諸過程における特性として位置づけてきたものは、有機的な事象の一般的特性なのである、という仮定を妨げるものはない。つまりそ

れが新しい限りにおいて、有機的事象は意識と結びつくのである。」(一一八頁)

「身につきつつあるものは意識的なもので、身につけてしまったものは無意識的なものである。」(一二〇頁)

シュレーディングーは、意識の働きには、脳の活動が不可欠であると考え、意識との結び付きを脳機能だけによるとする見解に対しては異議を示そうとした。意識化と脳機能についての、シュレーディングーの見解をまとめると、次のようになる。

1 世界をわれわれの前に現前させるものとしての意識の働きは、脳機能だけによるものではない。一方、脳の活動のすべてが意識化されるわけではない。

2 意識化とは、体に完全には組み込まれておらず、遺伝的にもまだ完全には定まっていないう有機的活動に属するものである。

3 人間の体に備わった意識は、脳の活動に属している。環境条件の変化に対応して変化する脳機能が意識化されるといふ限りにおいて、意識は脳の活動に属している。

4 脳が人類の発展に従事する器官であり、脳の活動はつねに習得の過程にある。

5 意識は、進化の領域における一つの現象である。

シュレーディングーは、特に、一人ひとりの人間が、過去幾度となく起こった諸々の事象が徐々に埋め込まれ記憶となったものの反復であり、個体に組み込まれた記憶と異なる新しいものだけが意識化されるという事実を重視した。それは、人間が生きているということ自体が、つねに生命の連続の最前線に立つて停滞することなく前進

することであるということの意味する。彼は、その事実が、倫理学を科学的に理解する可能性を開くと考えた。

#### ⑥ 道徳律について

「いつの時代にも、どんな人々にも、自己超克が道徳的要請の基礎をなしていた。このことは、道徳上の教えが常に「汝なすべし」という要請をまもって登場したし、またそうならざるをえなかったという事実によって明らかであろう。」(一二一頁)

「われわれ——すなわち常々自らをへわれわれ」と呼ぶことのできる人々は——「ずっと続いてきた」世代の最前線を行進しているのである。つまりへわれわれは進化しているのである。へわれわれ人間は、依然としてフル操業の状態で、日々少しづつ種「人間」の進化を遂行している。事実個々の人生、すなわち個人の日常生活は、たとえそれがいかにとるにたらないものであっても、種の微々たる進化を表現しているものである。(中略)われわれは整であると同時に、それによって彫られる形態であり、つまりは克服しつつあるものであり、同時に克服されつつあるものでもあるのだから、それは現実の、たえまない自己超克であると言えよう。」(一二四頁)

「だが要するに以下のことは理解できよう。すなわち、われわれの意識生活はすべて、昔から引きついできた自己と永遠に対立しながら発展してゆく、進化上の闘争なのだということ。そしてそれにもかかわらず、われわれの意識生活には、かくあるべしというための根拠づけ、すなわち倫理的価値判断のための根拠づけ、

あるいは「汝なすべし」という倫理的要請に対する根拠づけが、依然として欠けているのだということである。なぜなら、進化をより高次の目標に向かうことと規定する「進化」思想は、意識された内面的理由、もしくは道徳的要請のための動機に基づいたものだという、そのような子供じみた意見などを、私はここで支持するつもりは毛頭ないからである。この思想は、たとえば人格神への信仰が、一時的に道徳のための動機づけに利用されたように、一時的には受け入れられるものかもしれない。しかし道徳的要請は、カントが強調したように、まさに事実なのである。したがって、われわれが理解しなければならないのは、この事実があるということなのであって、この要請とすりかえられるような、経験上広い範囲にわたって様々に変化する動機なのではない。」(一三八、一三九頁)

シュレーディングーは、人間の意識の働きは環境への適応現象であるとする彼の仮説に基づく、エゴイズムを放棄し共存社会を形成しようとする人間の意識的な営み、またそのための「道徳的要請」の基礎が原初的な欲求に対抗する自己超克であるという事実が、自然に理解できると考えた。そのような意味で、倫理学が自然科学的な理解と一致するとしている。

- ここで述べられているシュレーディングーの見解をまとめると次のようになる。
- 1 一つの時代のどの人々にも、道徳的要請の基礎は自己超克であった。
  - 2 自己の原初的な欲求を抑圧し、現実にもうあるものと異なったものになるべしという要請は一見不自然に思われるが、有機体の進化の事実から得られる洞察によると、生きることは原初的な自我との闘いであらざるをえないことが理解できる。

- 3 道徳的要請は事実であって、事実に行先する内的動機によるものでない。したがって、われわれが理解しなければならぬのは、この事実があるということであって、道徳的要請のための動機ではない。
- 4 人類は、共存社会を形成するためにエゴイズムの放棄を始め、その方向への変革が進行中である。その変革は、自然法則のもつ必然性のゆえに、必ず実現される。
- 5 しかし、それはそのような変革をなしとげるべきだという結論を導くものではない。今日正常な資質の人によって、一般に、非利己的であることが疑問の余地のない理論上の価値基準とされている事実のなかに、利己的態度から利他的態度への、生物学上の変革の徴候が認められる。

⑦ 《「現実とはなにか」より》

① 不二の説 光と陰

「われわれは結局同じ環境にいるという、この経験上の事実を説明する目的で、現実中存在する物質世界を説明するのは、神秘的で形而上学的なことである。」(二〇〇頁)

「一つの単子のみが存在する」。そこで単子論の全体系からなにが帰結されるのか。それはヴェーゲンタの哲学なのである。(中略)その理念を手短に述べれば、われわれ一切生類は、本来唯一の实在の一面もしくは外観としてこれに属するものである、ということになろう。」(二〇二頁)

「かのショーペンハウエルは、この思想は自らの人生における慰安であったし、死に臨んでもそうであろう、

と述べた。この思想は、多分に「神秘的形而上学的」でありながら、現実に存在していると思われる外界の機能をも備えているのである。しかもこの外界というものは、いずれにしてもわれわれの心象にしかすぎず、確かに興味深いものではあるが、倫理的な結論へわれわれを導いてくれるものではないのである。」(二一六頁)

シュレーディングーは、「物質事象がどのようにして感覚や思考に変化するのかということとは、われわれには理解不可能である」(二四六頁)という困難から、二元論を放棄した。その帰結としてヴェーダ哲学の不二の説を、根本原理と考えた。

不二の説から導かれる二つの重要な結論があるとしている。一つは倫理的なもので、それは一切生類への慈悲と慈愛である。もう一つは、バラモン教の靈魂輪廻の信仰を背景とする生誕と死滅という永劫の輪廻で、シュレーディングーによると、それは「終末論的」な結論である。シュレーディングーは、前者には「喜んで賛同」(二〇三頁)するが、後者は、「現実にはひどく苦悩しながら生きている人間が、あるいは生きているひきがえるまでもが、なんら記憶のない過去の罪人の悪行をあがなうというのは、いかにも奇妙なことと思われる」(二二五頁)から「排除しなければならぬ」(二二五頁)と述べている。

#### ⑧ 驚きの二つの原因 代償の倫理

「最初の驚くべき実状とは、以下のことである。すなわち私の意識領域が、他のすべての人の意識領域から厳密に分離され、閉ざされた状況にある(中略)にもかかわらず、(中略)われわれが外界と呼ぶ経験のある部

分に関する、普遍的な構造上の類似が認識されてきたということである。これを簡単に表現すれば、われわれはみな同じ世界に住んでいる、ということになろう。意識領域の完全な分離にもかかわらず、(中略)共通世界に在ることを了解するという、この不思議な実情と明確に区別しなければならぬもう一つのことがある。それはすなわち、感覚領域の分離にもかかわらず、いわゆる外的部分と呼ばれるものの広範囲にわたる一致ないし相等性が、そもそも現実にあるということである。(中略)この第二の実状は合理的には理解しえないということが、本質的なことなのである。これを理解するためには、以下のような非合理的で神秘的な二つの仮定をせざるをえない、すなわち(1)いわゆる現実の世界という仮定か、(2)われわれはすべて本来唯一の实在の外観にすぎないということの容認かである。(中略)そして実際の倫理的な結論は、この二番目の概念(すなわち不二の説)から容易に導かれるのである。

だがこの不二の説の方が、より神秘的で形而上学的に見えるということは、容認していただかねばなるまい。(中略)しかしそのようなことは、不二の説がわれわれの束の間の人生に与えてくれた、喩えよ、うのない高次な倫理的充足感と深い宗教的慰安とに比すれば、とるにたらない欠点としか思われないのである。そのいずれもが物質主義にはないものなのである。」(二一八―二二二頁)

「われわれの住む世界は共有されたものであるという、ただそのことのみによっても、それが形而上学的にどう理解されようとも、ある種の倫理が導かれるというのは、認めねばならぬことであろう。私はこれを代償の倫理と呼びたい。」(二二三頁)

「他人の人格と自分の人格との類似性に基づく、現実の外的世界という通常の仮定から導かれたこの代償の道徳を、低く評価しない方がよい。」(二二五頁)

現実世界に関して注目すべきこととして、シュレーディングラーは、次の二つの現実をあげている。

1 個々人の意識領域が分離されているにもかかわらず、共通世界の認識とその相互の了解が可能であること。  
2 客観的な外的部分の共通性は、外界の存在ゆえに現実のものであること。

この両者を区別する必要がある、合理主義的考への人は、何の疑念もなく2を受け入れているが、2を合理的に理解するのは不可能であると、彼は指摘している。それを理解するためには、現実の物質世界を真の实在とするか、あるいはわれわれはすべて本来唯一の实在の外観にすぎないとする不二の説か、いずれにしても「非合理で神秘的な」どちらかの仮定をせざるを得ないとしている。

シュレーディングラーは、人間が社会的動物として生きていくためには倫理が不可欠であり、通俗的な物質主義から倫理は生まれてこないと考えている。不二の説こそが無理なく倫理を導くものであるとの結論に達し、これが彼の世界観の基盤をなしている。

ここで述べられている「代償の倫理」(Ersatzethik)とは、「相互理解の倫理」あるいは「相互扶助の倫理」とも言える。

以上、シュレーディングラーの「わが世界観」に記述されている「道徳性の科学的理解」の内容を要約した。それは、道徳律の生物学的根拠づけであり、さらには、深い「哲学的驚嘆」にもとづく、周到な、科学的知識と道

徳の統合の試みであると言える。

『道徳科学の論文』には、道徳律の科学的研究について、「従来の倫理学者よりかえって他の科学者の間において、普通にその可能が信ぜらるることになってきた」(『論文』①八頁)という記述がある。たとえば、ヘッケルの「生命の不可思議」から「道徳の規則は生物学的根拠に基づいており、且つ自然的に発達してきたものである」(『論文』①九頁)の引用があり、またゴアの「道徳の新科学的体系」からは「人間行為のほとんどすべての現象が、他の証明されていない叙述の助けを借りなくとも、科学の主要原理によって合理的に説明できることを簡潔に示す」(『論文』①九頁)という記述が引用されている。そのように、道徳の科学的な研究の基礎として、科学者による道徳律の科学的理解にも注意が向けられている。

シュレーディングラーの科学的理解は、ヘッケル、ゴアなどの理解と、その内容が異なるが、道徳性の科学的理解の試みという点では、その趣旨を受け継ぐものである。シュレーディングラーの後、たとえば分子生物学などの進歩によって、理解の基礎となる知識の内容は大きく変化し非常に豊富になった。しかし、知識の増加に伴って、それらの知識を基礎に、人間の道徳性や社会の道徳律を研究し理解しようとする試みが多くなされ進歩してきたとは言えない。

## 七、科学的理解と実践

道徳の生命は実行である。したがって、道徳についてのいかなる種類の理解も、それがどのように実践につながるかが最も重要な問題である。実践の基礎として、科学的理解も重要な役割を果たしているが、たとえば、具体的な道徳的要請を事実として知的に理解したとしても、その理解だけから、実行の方法が導き出され、さらに

それが実行に移されるといふことはない。

シュレーディングガーも、たとえばショーペンハウエルの例をあげて、高次の倫理の理解とその実行は「まったく別の問題」(『わが世界観』二二六頁)であると述べている。理解されたことが実行に移されるためには、知的理解を超えた何かが必要である。それは、知性と感情を含み、勇気や安心、喜びなどを伴う何かで、知的理解はそこにつながる予備段階である。したがって、道徳の理解については、その何かにつながり、さらに実践につながり易い理解が、より望ましい理解の形であると言える。

シュレーディングガーの「科学的理解」の基礎は、ヴェーゲンタ哲学の不二の説である。不二の説を基礎として、事実を理解することが、倫理的な結論を生み出し、またそれによって、人間の道徳性や人間社会の道徳律が、事実として、無理なく自然に理解できることを説明しようとしている。基盤となる不二の説はシュレーディングガー自身が認めているように、通常の意味での科学的理解を超えたものである。その根本となる「唯一の实在」については「西洋流の用語ではおそらく神と呼ばれるものなのであろうが、ウバニシャッド哲学ではブラフマン(梵)と名づけられているもの」(『わが世界観』二〇二頁)と記述されている。

『道徳科学の論文』には、「最高道徳は絶対神の存在を認む」(『論文』⑦二二二頁)とあり、神(本体)の存在及び性質を直接に科学的に記述証明することはできないが、聖人の教えによれば、その性質は、「第一、宇宙現象の根本なること、第二、宇宙に唯一であること、第三、真正であって、仮説でもなく、空想の結果でもないということ、第四、時間及び空間を超越して絶対なること、第五、万能すなわちあらゆる働きを有すること、第六、実際にこの宇宙の間に生きておること、すなわち無始の初めより常に生ける存在として働きつつあるということ、すなわち人格的に働いてこの宇宙を支配しておる」(『論文』⑦二二七頁)とされている。

神の働きと人間とのつながりについては、たとえば、「神の實質は世界諸聖人の教説・教訓及びその実行上に一貫するところの事跡より推せばいわゆる慈悲であるので、その作用はいわゆる自然の法則である」(『論文』⑦二二九頁)、「宇宙の現象をもって神(本体)の力の表現であると考え、私も自身の肉体をはじめ森羅万象一切を挙げてこれを神の肉体の一部分として尊敬する」(『論文』⑦二四八頁)、「私どもの一切の精神生活及び物質生活をもって、神の恩恵に出ずるものとして感謝する」(『論文』⑦二四八頁)、「極めて最初の人間の靈はみな同じ神の分靈で、その肉体はこの宇宙の一部分たる幾つかの原子の結合したもの」(『論文』⑦一五三頁)、「本体はわれわれ人間の肉体の細胞内に宿りて直接にわれわれの生命を守護する」(『論文』⑦二二二頁)、「私どもの心をもって神の分靈となす」(『論文』⑦二四九頁)などの記述がある。

以上より、最高道徳の根本であり、その起源であるとされる神は、

- ① 万物はその一部であり、
  - ② あらゆる現象は神の心の表現であり、
  - ③ 人間の心はみな同じ神の分靈であり、
  - ④ 神の實質は慈悲であり、われわれを生み出し守護するものである、
- などの觀念をその基礎としている。また、宇宙の本体としての神を信じて、一切のものを神の恩恵として感謝し受け止めることが、最高道徳実行の基盤となっている。

人間の肉体も神の一部であり心は神の分靈であるとする觀念は、梵我一如に通ずるものである。したがって、梵我一如が倫理の根源にあるとして、その觀念に道徳律の起源を求めたシュレーディングガーの洞察は、最高道徳の根拠が上記のような觀念を基礎とする神であるとする廣池千九郎の考え方と、その根本は共通するものである。

シュレーディングラーは倫理の必要性を非常に重視していて、晩年の記述からは、そのことが、彼が不二の説を採用する上で最も重要な根拠となっていたという見方もできる。そのことからすると、彼の見解も、その根本は、道徳が知識に先行する考え方であるとも言える。

しかし一方、道徳的要請は、まったく生物学的事実であって、内的な道徳的動機をその根拠として認めようとする点では、それはまったく知識が道徳に先行するとする考え方である。その点は、はっきりと廣池千九郎の考えと相違する。

道徳律をまったく生物学的事実とする考え方は、最近ではたとえば、リチャード・ドーキンスによって強く受け継がれていて（ドーキンスがシュレーディングラー個人の、その考え方を受け継いだということではない）、「利己的な遺伝子」として知られる学説では、遺伝子の働きから、その考え方が、より具体的な形で明確に表現されている。

廣池千九郎は、道徳実行の基盤として、神を事実認識の根拠として認めるだけでなく、その存在と働きを恩恵として受け止め、神を尊敬し神に感謝することを重視している。それは、道徳の実行が人類の幸福実現の根本であり、神を知的に理解し認めるだけでなく、恩恵として受け止める心の働きが、最高道徳実行の基礎であるという認識から発している。それはさらに、神を知的に認めるだけでも、そこから倫理的な結論が導き出され、心の慰安が得られるが、それだけでなく、神を尊敬し神に感謝する心の働きは、道徳実行の内的動機となり、実践への力を引き出して、それがより以上の効果をも生み出すという認識であり、そのことが最も重視されているという点である。

理解の内容そのものよりも、その理解が道徳実践につながって、実際に幸福が増進されることがより重視されている。たとえば、『道徳科学の論文』の中で、「人間と動物の精神的方面における差異」についての学説が取り上げられていて、その一説について、「かかる人間の文化・道徳もしくは幸福というごとき重大なことに向かつては、科学者の責任としては、いまいっそう精しくこれを説明して人間の文化もしくは道徳の進歩に資することとき説明をなさねばならぬ」（『論文』②二七一、二七二頁）という記述もある。

シュレーディングラーは、物質主義から離れた不二の説が、人間を自然に倫理的な結論に導き、人間に「高次な倫理的充足感と深い宗教的慰安」（『わが世界観』二二二頁）を与える事実を重視している。しかし、不二の説の根本となる「ブラフマン（梵）」の觀念が、恩恵の主体に対する尊敬・感謝となり、それが道徳実行の内的動機につながるという受け止め方はされていない。シュレーディングラーにおける「ブラフマン」と、廣池千九郎における「神へ本体」とを比較すると、その理解の内容はよく重なり合っているとしても、知のみでなく情・意をも含めた受け止め方に相違がある。

その相違は、たとえば、人格神についての考え方の違いとなって表われている。『道徳科学の論文』には、「最高道徳においては、単に宇宙の本体を認むるのみならず、更にその神を人格的にみる」（『論文』⑦三三五頁）、「学問的に合理的と思わるところの神に関する觀念は、これを人格的に見ることによって、はじめて真に根本的且つ本質的に理解される」（『論文』⑦三三七頁）とある。一方、シュレーディングラーは、人格神について、「人格神への信仰が、一時的に道徳のための動機づけに利用された」（『わが世界観』一三八、一三九頁）としている。

『道徳科学の論文』では、道徳の問題を科学の知識に基づいていかに理解し説明するかよりも、「いかなる知識が道徳と一致するや」（『論文』②二一七頁）の問題がより重視されている。ここで、「知識が道徳と一致する」とは、その精神が人類の幸福実現の上にあり、その知識が、神の心と一致する慈悲心と救済心を基礎としているこ



とを意味している。

モラロジーは、「新科学」として提示されているが、それは、科学的研究の伝統を受け継ぐだけでなく、それ以上に、聖人の慈悲心と救済心を継承するもので、それがモラロジーの根幹にある生命である。聖人の慈悲は、神につながる世界を誰の心にも覚醒し、誰もがその慈悲を実現して幸福を増進して欲しいという願いと折りで満ちている。聖人の慈悲心と救済心は、一人ひとりの道德実行によって成就されるが、道德は、他の誰のためにも替わって実行することはできない。

モラロジーでは、「科学的」な方法が尊重され、科学的な事実がその重要な基礎となっている。しかし、道德は、科学だけから導かれるものでなく、その最も重要な根拠は、聖人の無我の慈悲心とその実行に置かれている。道德にかかわる問題を研究する上でも、科学的な方法は重要な手段となるが、モラロジーにおいて「科学的方法」が尊重されることについての最も重要な意義は、それが、異なる考え方に基づいて生きる多数の人々に、まず事実についての確かな理解と納得を与える上で、現在知られている最善の方法であるということである。

## 八、むすび

最高道德では知徳一体が重視され、「真の知識は必ず道德を含み、真の道德は必ず知識の基礎の上に立つ」（『論文』②二二五頁）とされている。しかし、現実の人間の実状は、道德の問題を、（通常の意味での）科学的な方法によって研究することができるとかどうかという問いに対してさえも、共有できる解答が得られているとは言えない。したがって、現代に生きる人間の現実として、誰の内面でも、科学的知識と道德的判断とは一体となっていない。

その実状は、道德に十分な科学的根拠づけがなされていないとも言えるし、逆に、科学的知識に十分な道德的根拠づけがなされていないとも言える。いずれのアプローチを重視するかは、道德と知識のどちらを先行するものとして考えるかによる。モラロジーの立場では後者が重視されるはずであるが、聖人の慈悲心と救済心を継承する「究極の目的」からすると、その対象と状況により、両方のアプローチが尊重されなければならない。

本稿では、相互扶助的な秩序への道を開くための、人類をつなぐ道德への手がかりを求めるというという視点から、主に、道德の科学的根拠づけという方向から、科学的知識と道德的判断の統合の問題を取り上げた。それは、科学的知識から分離されている道德の問題を、科学的知識に基づいて理解し説明する試みが、現在の状況の中から建設的な方向を生み出す上で、現実的で有効な一つのいとぐちになると考えるからである。

人類をつなぐ手がかりとして、分かり易く、自然に受け入れられる標準が求められる。しかし、それは、表面的な妥協を求めるようなものでなく、人間存在の根本によって基礎づけられ、人間自身が変わる道を開くものでなければならない。

『道德科学の論文』には、「その研究の究極の目的はこの最高道德の全人類に必要な証左を科学的に提供するにある」（『論文』①五八頁）とあり、すべての人々に理解が伝わり、その理解が実行につながるものが重視されている。多数の人々の実行につながる理解へのアプローチとして、以下の三つの基本的な方向が考えられる。

- ① 従来の自然科学的方法にしたがって、まったく客観的事実として説明する。
  - ② それとは全く別の方法を採用する。
  - ③ 科学的方法も尊重するが、それ以外の実行につながる有効な方法を重視する。
- シュレーディングの理解は、実質的には、やはり①の傾向が強い。モラロジーの立場は③である。

人類全体が、人類史上はじめて、多くの具体的な問題を、人類共通の問題として意識しはじめている。それらの解決には多大な困難が予測されるが、人類的・地球的な課題は、人類全体の心を動かし、その解決に向けての協調と努力を通して、人類を大きく変える可能性をも秘めている。本論は、そのような流れの中で、相互扶助的な秩序への手がかりを求め一つの試みである。